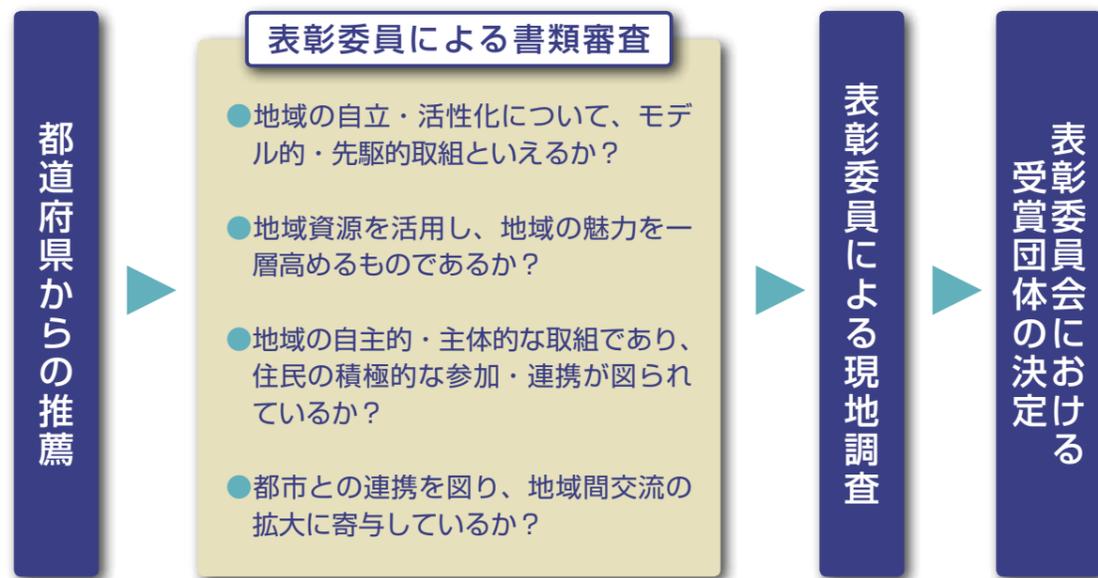


過疎地域自立活性化 優良事列表彰制度の概要

今日、多くの過疎地域においては、人口減少や高齢化の進展等のため、地域産業が停滞し、生活基盤の格差が残されているなど、依然厳しい状況にあります。しかし、近年、地域間交流の拡大、情報通信の発達、価値観の多様化等、過疎地域を取り巻く環境や時代の潮流は大きく変化しています。

こうした中で、今後、過疎地域は、豊かな自然環境に恵まれた生活空間を提供するとともに、地域産業と地域文化の振興等による個性豊かで自立的な地域社会を構築することにより、過疎地域の住民福祉等のためだけでなく、我が国が全体として多様性と変化に富んだ、美しく風格ある国土を形成することに寄与することが期待されています。

このことから、本制度は、過疎地域の自立促進に資するため、地域の自立と風格の醸成を目指し、過疎地域においてこれらの課題に取り組み、創意工夫により活性化が図られている優良事例について表彰を行うものです。



表彰式
 日時：平成26年10月9日(木)13時20分
 場所：三重県営サンアリーナ(全国過疎問題シンポジウム全体会場)
 三重県伊勢市朝熊町字鴨谷4383番地4

平成26年度表彰委員会委員 (敬称略)



委員長 **宮口 侗徳**
みやぐち としみち
 早稲田大学教育・総合科学学術院教授



委員 **関司 直也**
せし なおや
 法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科准教授



委員 **谷 隆徳**
たに たかのり
 (株)日本経済新聞社 論説委員兼地方部編集委員



委員 **平尾 由希**
ひら おゆき
 フードコーディネーター 元NHKキャスター



委員 **松永 桂子**
まつなが けいこ
 大阪市立大学大学院 創造都市研究科准教授

委員長講評

宮口 侗徳

過疎地域のお手本になるような取組の表彰が始まってほぼ四半世紀の間、都市経済と縁遠い多くの過疎地域において、すばらしい取組が生まれてきました。その中から今年度は、所定の手順で総務大臣賞4団体、過疎連盟会長賞2団体を選ばせていただきました。

総務大臣賞のうち3団体は、従来型の観光資源に恵まれない地域で、まさに住民の手づくりによって、都市ではつくることができないツーリズムを育てられています。平成16年設立の三重県鳥羽市答志島の「島の旅社推進協議会」は、漁業で生きる島の女性たちが、海の幸のつまみ食いや海女小屋のツアー、さらに多彩な体験メニューで、着実に人を惹きつけてきました。無理に客を増やそうとするのではなく、島本来のくらしの価値を味わってもらう姿勢での活動の継続が素晴らしいと思います。

鹿児島県南九州市の「NPO法人顔娃(えい)おこそ会」は、地域の有志の平成17年の設立ですが、タツノオトシゴ養殖に成功したUターンの兄弟、Uターンしたお茶農家の後継者夫妻、ユニークな願掛けの釜蓋神社の関係者などが加わり、マップ「えい日和」の作成、風光明媚な海岸での鐘の設置、眺望すばらしい大野岳での茶寿(108歳)階段の整備など、地元経済人とUターンの若手の協働が評価されました。

岐阜県下呂市の「NPO法人飛騨小坂200滝」は、有志が大小200を超える滝が地元にあることに気づき、平成18年に設立、滝めぐりツアーの14コースを設定し、ツアーガイドを開始しました。滝はもともとあったものですが、眠っていた地域資源を発掘し、その価値に接してもらう体制をつくり上げた結果、観光客も大幅に

増えています。

いま一つの大賞の島根県益田市真砂地区は、小さな中山間地域の公民館が核となって平成23年に地域商社らと協働のトライアングルをつくり、食材の販売と保育所・小中学校の食育に尽力して、地域雇用と耕作放棄地の解消に大きく役立っています。まさに住民が一体となった手づくり自治区で、地域の持つ人と資源の価値を子どもたちに伝え、地域への愛着を育てていることが素晴らしいと思います。

連盟会長賞の三重県尾鷲市の早田地区では、限界集落問題が話題になる中で女性懇談会の開催や大学との連携が始まり、平成21年に「ビジョン早田実行委員会」を設立しました。漁業者部会では11名の担い手が生まれ、HPの発信、美化活動、慶大ゼミとの提携による笑顔食堂設置など、次々に意義のある活動が生まれているところが評価されました。

続いて徳島県那賀町の「もんてこい丹生谷運営委員会」は、町出身者にミュージカルで「もんてこい(戻ってこい)」と呼びかける活動を平成21年に開始、東京や大阪で上演してきました。台本は町の職員、作曲は中学生が担い、中学生から70代までがふるさとのよさを訴えるユニークな活動です。観客の多くは涙し、50人のUターンが生まれるなど、実際にふるさと回帰の流れをつくり出しています。

今回は、平成の合併前の旧町や地区をベースにしたNPOまたはそれに近い活動団体が多くを占めましたが、町全域でユニークな取組をされた例もあり、その内容はやはり多彩でした。一つとして同じものはないそれぞれの過疎地域での独自の取組に、心から敬意を表させていただきます。

特定非営利活動法人 飛騨小坂200滝

滝の数日本一！「滝めぐり」で町おこし！



龍門の滝（15m）。5万4千年前の御嶽山の噴火で流れ出た溶岩流が、永い年月をかけて水の力によってくり抜かれ、天然の石橋が完成。

事例の概要

「NPO法人 飛騨小坂200滝」は、少子高齢化が進み、また、「日本一滝の多い町」として知られながらも年々観光客の減少が続いていた下呂市小坂町において、この状況に歯止めをかけ、この地域資源を生かしたまちづくりを目的として、平成18年に設立された。

設立以来、「滝めぐり14コース（76滝）」を設定し観光客のガイドを行うと同時に、地域の魅力を後世に引き継ぐために市内の小・中・高校へ出向き、小坂の滝めぐりや地域資源の素晴らしさを紹介する活動を行ったり、市民を対象とした滝めぐり体験ツアーを行ったりするなど、精力的に活動している。

また、地域の人々と連携して、御嶽山麓に抱かれた豊かな自然と地元で古くから伝わる文化、伝統を訪れた方に体験していただく「小坂スタイル」というツアースタイルを提唱することで、周辺施設の利用者増にも寄与するなど、小坂地域のみならず、下呂市全体の地域活性化に寄与している。



NPO法人 飛騨小坂200滝のみなさん

評価のポイント

岐阜県の旧小坂町は平成16年に近隣4町村と合併し、現在は下呂市の一部になっている。北に飛騨高山、南に下呂温泉という著名な観光地があり、目立った観光資源がない小坂地区では旅館の廃業が続いていた。

そこで地元有志が地域資源を生かそうと地元にある滝を現地調査し、大小200を超す滝があることを確認。「滝の数・日本一」を掲げて滝めぐりツアーとして14コースを設定し、コース整備やガイドを務めるNPO法人「飛騨小坂200滝」を平成18年に設立した。岐阜県も平成20年に「岐阜の宝もの」の第1号に「小坂の滝めぐり」を選んだ。

それ以降、観光客が増加し、平成19年には1万人台だった入り込み客は平成25年には5万3千人に増えた。滝めぐりツアーの拠点となる「がんだて公園」には観光客の増加をきっかけに地元の食材を使った食堂が新規にオープンし、集客が伸び悩んでいた周辺の温泉施設など

の利用客も増えている。近隣の旅館が「どぶろく特区」の認定を受けて自家製のどぶろくの提供に乗り出したり、滝めぐりとセットになった宿泊プランを企画したり、波及効果が広がっている。

この事例の最大の特徴は「眠っていた地域資源」を地域住民が自ら発掘した点にある。加えて、NPOと自治体、商工会などが積極的に連携しており、滝を目当てに訪れる観光客の増加が周辺の観光施設の集客増につながっている。ツアーのガイドは大半が元自治体OBなどによるボランティアであるが、30歳代の若手がリターンしてきて専業で取り組むなど、今後のステップアップに向けた基盤もできつつある。観光資源という面でも、初心者から上級者まで楽しむことができる多様な滝めぐりコースを設定したことでリピーターが期待できる。

本事例は、こうした点が高く評価された。



小坂の滝めぐりに訪れたオーストラリアの観光客に滝めぐりの魅力を伝えるため、地元の高校の生徒と一緒に案内。



自分自身の手で雪歩きのための「わかんじき」を作り、冬ならではの神秘的な氷瀑に出会うツアー。



自然環境保全の取り組みとして「湿原の回復作業」を実施。この作業は学校の体験授業として大阪の修学旅行生を受け入れている。

DATA 岐阜県下呂市（げろし）

団体名●特定非営利活動法人 飛騨小坂200滝
所在地●〒509-3104 岐阜県下呂市小坂町小坂町769番地
連絡先●TEL:0576-62-2215 FAX:0576-62-2818
E-mail:hidaosaka200taki@ever.ocn.ne.jp URL:http://www.osaka-taki.com/

【交通のご案内】(下呂市小坂町まで)

自動車●東海環状自動車道 富加関ICから約1時間30分
中部縦貫自動車道 高山ICから約40分
中央自動車道 中津川ICから約1時間30分
国道41号 下呂温泉から約30分/高山市街地から約40分

鉄道●高山本線特急ワイドビューひだを利用 名古屋から下呂まで約1時間40分/富山から高山まで約1時間35分
高山本線普通列車を利用 下呂から約25分/高山から約35分

▶国勢調査人口（単位：人）

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
48,314	42,581	40,102	38,494	36,314

▶人口増減率（単位：％）

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-24.8	-14.7	-9.4	-5.7

▶高齢者・若年者比率（H22年）（単位：％）

高齢者比率（65歳以上）	若年者比率（15歳以上30歳未満）
33.1	10.6



島のかあちゃんたちがもてなす「島の旅」



大潮の時にできる干潟で水生動物の観察を行う「浮島自然水族館」。子どもたちは磯場で生き物の命や自然環境について学ぶ。

事例の概要

鳥羽市は、市内全域が伊勢志摩国立公園に指定されており、特に有人離島は恵まれた自然とそれぞれの島特有の歴史文化を有している。

平成17年の中部国際空港の開港にあたり、一人でも多くの人々が鳥羽市を訪れるための「島の旅社」構想が鳥羽市戦略プランの中で提案され、この構想をもとに、島の女性と島外から島に嫁いできた女性を中心となって、鳥羽市にある島の住民により、平成16年に「島の旅社推進協議会」が設立された。

以後、島の資源を有効に活用した海女小屋体験、浮島自然水族館など各種体験メニューのプロデュースを行い、地域と連携しながら、様々な事業を展開している。これらの体験メニューの取組により、毎年1,300人を超す参加者があり、交流人口の増加や島への経済効果を生んでいる。



島の旅社推進協議会のみなさん

評価のポイント

豊かな自然と特有の歴史文化や生活が息づく4つの有人離島をもつ鳥羽市では、「鳥羽市戦略プラン」の作成に向けてワーキングチームが立ち上がり、市役所職員と島民が一緒になって、様々な形で島の資源の掘り起こしが行われた。

そして、鳥羽市答志島で、「ないものねだり」でなく「あるものさがし」をして、その魅力を島外の人に知ってもらい、島内の人には再発見してもらうことをコンセプトとして、平成16年に設立されたのが「島の旅社推進協議会」である。

その活動は、期日限定で無人島の自然の中で遊び学ぶ「浮島自然水族館」、島の人たちが普段食べている島の逸品を味わいながら島のかあちゃんたちのガイドで巡る「路地裏つまみ食い体験と海女小屋」ツアー、港での魚釣りや市場見学、漁師さんから網の扱いを学ぶロープワーク実習などを組み合わせた小学生向けの体験学習プログラムなど多岐に渡る。年に10日程度しか開催できないメ

ニューもあるが、リピーターが多く安定した集客を獲得している。

スタッフを務める女性の多くが漁業関係者であり、「作りもの」でない島にある良さを丁寧に伝えていること、島民が協力して活動を支えていること、まず家々での漁業の営みを大切にして無理に多くの集客を得ようとせず、島の良さ・生活空間を楽しんでもらえる規模に留めていることなど、「島の旅社」のみならず、島全体が一丸となって地域振興に取り組んでいることが高く評価された。

島民自身の「島の人々が島のことをよく知らない」という気付きをそのままにせず、それを原点に島民の暮らし調査や海岸線調査等を行い、島の資源を掘り起こし、時間を掛けて丁寧に下地を作りコンセプトを定めたこれまでの活動は目に見える着実な成果を挙げており、今後は、更にこれらの活動を島民の誇りの醸成や島の経済循環に結びつけていくような取組にも期待したい。



答志島の沖合に浮かぶ無人島の「浮島」に行き、大潮の時にできる干潟で水生動物の観察を行う「浮島自然水族館」。学んだ後はリリース。



大漁、海上安全を祈念して行われる八幡祭りの説明に耳を傾けている外国から来た観光客。答志島の文化に興味津々。



島外から嫁いできた花嫁が中心になり、見過ごされがちな島の伝統や歴史文化、風習を発掘して、お客さんに島の魅力を体験していただく。

DATA 三重県鳥羽市 (とばし)

団体名 ● 島の旅社推進協議会
所在地 ● 〒517-0002 三重県鳥羽市答志町943
連絡先 ● TEL:0599-37-3339 FAX:0599-37-3344
E-mail:info@shima-tabi.net URL:http://www.shima-tabi.net/

【交通のご案内】
(1)各地から佐田浜港まで
自動車 ● 伊勢自動車道伊勢ICから伊勢二見鳥羽ラインで10分
鉄道 ● JR参宮線鳥羽駅、近鉄鳥羽線鳥羽駅から徒歩10分
飛行機 ● 中部国際空港から名鉄(名古屋まで)、JRまたは近鉄で1時間30分
(2)佐田浜港から和具港まで
船 ● 市営定期船で20分(和具港から徒歩5分)

▶ 国勢調査人口 (単位:人)

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
30,521	28,812	24,945	23,067	21,435

▶ 人口増減率 (単位:%)

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-29.8	-25.6	-14.1	-7.1

▶ 高齢者・若年者比率 (H22年) (単位:%)

高齢者比率(65歳以上)	若年者比率(15歳以上30歳未満)
29.7	13.3



公民館と学校と地域商社との協働の トライアングルによる地域運営の仕組みづくり



生産者会議&保育所給食会議：生産者さんと毎週1回集まって何を出荷できるかを話し合う。月1回は保育所の給食の先生も参加する。

事例の概要

少子高齢化が加速度的に進行する「益田市真砂地区」は、自治会単位でのコミュニティ維持が困難な状況にあると同時に、そこには、地区の未来を担う子どもたちと共に地域づくりに関わろうとする意識が強くあった。

このような状況の中、公民館が核となって、未来を担う子どもたちとそれを取り巻く学校や保護者と地域の経済力向上を図る地域商社を巻き込んで、協働のトライアングルを形成した。

そして、多くの地区住民が関わっていける「食育活動」に着目し、地域に元気をもたらすキーポイントとなる「地域づくり（地域課題に取り組み）」「学びの場づくり（地域を理解する）」「なりわいづくり（地域雇用の創出）」に取り組み、多様・多世代の住民の地域活動への関わりの中で地域力の向上を生んでいる。



真砂地区のみなさん（関係保育所の園児たちもいっしょに）

評価のポイント

少子高齢化に歯止めがかからず自治会単位でのコミュニティの維持が困難な状況にあった益田市真砂地区では、公民館を核とした住民参加型の地域運営の仕組みづくりを目指して、①真砂公民館、②地域商社（有）真砂、③真砂小・中学校の3者による協働のトライアングルが形成された。

通常、「公民館」は市や町が運営する社会教育・生涯学習の場とされているが、真砂地区では少し趣が異なる。それは、地区に最も身近に寄り添いながら、公民館自体が強い意欲と使命感を持って主体的に地域運営に取り組んでいる点である。

その活動は、食育を施すことにとどまらず、地域の宝である子どもたちの柔軟な発想や感覚を大切に、取り入れることで、地元食材や開発された地域商品が広く長

く住民から愛されるものになるとともに、子どもたちの自主性と強い地域愛を育てる結果に繋がっている。

また、食育活動、加工品開発・販売、保育所への食材提供などが、真砂地区の生活基盤である農業の生産力の向上に繋がり、各組織が主体性を持って行う、各々にメリットがある食に関する多彩な事業への挑戦は多くの地域住民を巻き込んでいる。そして、問題・課題を共有しつつ、それぞれが深く関わり合いながら行う積極的な地域運営が、真砂地区に大きな好循環をもたらしている。

人と人の結びつきを強めながら、理想論にとどまらない成果をあげる真砂地区の「実行する地域」としての先進的・発展的な取組は、他の地域に勇気を与えるモデルケースとして高く評価される。



真砂中学校職場体験：地域グループの方の畑や田んぼに入って農業体験。地域生産者の指導のもと、農業の大変さなどを学び貴重な体験になった。



給食食材出荷：真砂の安心安全で旬な野菜を週に2回出荷。保育所からは子どもたちが風邪に強くなった、お通じが良くなったとの嬉しい報告を聞いている。



地域活性化を目的に立ち上げた「地域商社」のこだわりの豆腐。益田市ブランド商品にも認定され、今では多くの家庭に欠かせないものとなっている。

DATA 島根県益田市（ますだし）

団体名 ● 益田市真砂地区

所在地 ● 〒698-0411 島根県益田市波田町イ538-1
（益田市真砂地区振興センター）

連絡先 ● TEL:0856-26-0002 FAX:0856-26-0002
E-mail: csc-masago@city.masuda.lg.jp URL: http://masagoplus.jp/

【交通のご案内】

自動車 ● 1. 浜田自動車道浜田ICから、国道9号線で約50分
2. 中国自動車道戸河内ICから、国道191号線で約90分

鉄道 ● JR山陰本線及びJR山口線益田駅

飛行機 ● 萩・石見空港から益田駅までバスで約10分

▶ 国勢調査人口（単位：人）

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
70,018	59,040	54,622	52,368	50,015

▶ 人口増減率（単位：%）

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-28.6	-15.3	-8.4	-4.5

▶ 高齢者・若年者比率（H22年）（単位：%）

高齢者比率（65歳以上）	若年者比率（15歳以上30歳未満）
30.9	11.1



特定非営利活動法人 額娃おこそ会

地域総力戦による観光まちおこし



メディア登場の増加で、5年前まではほとんど町外来訪者のいなかった釜蓋神社に多くの来訪者が訪れる様になった。写真は元旦の参拝者の行列。

事例の概要

「NPO法人 額娃おこそ会」は商工会のまちおこし部会を母体とするが、地域経済の衰退が顕著な南九州市額娃地区において、官民、農商工の枠を超え「いつまでも住みたいと思える魅力あるまち」を創ることを目的に平成17年に設立された。平成19年にNPOに改組し、①まちづくり事業 ②体験型観光事業 ③特産品事業等を中心に活動している。

昨今最も活発なのは観光を通じたまちおこし活動であり、景勝に恵まれながらも観光誘致に生かしていなかった釜蓋神社や番所鼻公園、大野岳など町内スポットの磨き上げと観光資源化への取組は、観光雑誌掲載や来訪者増加に結びついた。こうした観光誘致の動きは額娃地域全体に波及し、おこそ会を起点とした観光、農業、商工、行政など各組織間の横断的ネットワーク化に繋がるとともに、観光まちおこし活動に地域住民が参加することで市民の郷土意識向上にも寄与している。



おこそ会のメンバー達：大野岳を望むサツマイモ畑にて。メンバー自らが収穫したイモで焼酎をつくる。

評価のポイント

平成19年に額娃町・知覧町・川辺町が合併して誕生した南九州市において、額娃地域は、武家屋敷や特攻平和会館がある知覧と指宿の間にあり、開聞岳を望む風光明媚な海岸を持ちながら、観光通過地点となっていた。

このような中、かねてから地域の状況に危機感を持っていた住民が、まちおこしを目的として、平成17年に「額娃おこそ会」を立ち上げた。その活動は、タツノオトシゴの養殖を観光養殖場「タツノオトシゴハウス」に発展させた1ターンの民間業者との連携につながり、タツノオトシゴの夫婦愛にちなんだ「亀のおとし子吉鐘」の設置（番所鼻公園）や、「釜の蓋を拝殿まで頭に載せて願をかければ願いが叶う」ユニークな願掛けが評判となった釜蓋神社などを紹介する観光マップ「えい日和」の作成、著名人の参拝もあって業界の評価も高まり、額娃地域への来訪者も増加した。

額娃おこそ会は、メンバーが重なる釜蓋まちおこし会、茶寿会、中心部の石垣商店街等との連携の中心組織として活動し、これを額娃観光協会と商工会額娃支部が支えるという、いわば協働ネットワークの要として、それぞれの持ち味を生かして人と人の間に新しく強いつながりを創出し、短期間に旧額娃町の資源を育て、結び付けてきた。この成果は、斬新なアイデアを持つ1ターン（タツノオトシゴハウス）と地域で生きようとするUターン（茶農家の女性後継者）の若者と、その価値に素直に反応した地元の人々のまさに協働の賜物と言える。

本事例は、このような点が高く評価された。



えい日和完成：完成した額娃観光散策マップを持つ編集メンバーによる記念撮影。NPOが来訪者目線で作ったマップとして新聞にも広く紹介された。年間3万部を町内スポットで配布。



お茶振る舞いツアー：農業のまち、額娃では茶農家グループが観光客に対し「グリーン・ティ・リズム」と称した独自のもてなし対応を行っている。茶摘採機への試乗の様子。



吉鐘建立：観光地でなかったまち、額娃における観光まちおこし活動の起点ともなるのがこの鐘を番所鼻公園に設置したことだった。公園のシンボルとなり来訪者増や整備事業誘致に繋がった。

DATA 鹿児島県南九州市 (みなみきゅうしゅうし)

団体名 ● 特定非営利活動法人 額娃おこそ会
所在地 ● 〒891-0704 鹿児島県南九州市額娃町別府5202
連絡先 ● TEL:0993-38-0160(いせえび荘内) FAX:0993-38-2721
E-mail:iseebiso@coffee.ocn.ne.jp URL:http://ei-okosokai.jimdo.com/

【交通のご案内】

自動車 ● 指宿スカイライン額娃(えい)ICから県道234号で約20分
鉄道 ● JR指宿枕崎線「水成川駅」下車から徒歩15分
飛行機 ● 鹿児島空港から自動車で約1時間50分



▶ 国勢調査人口 (単位:人)

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
74,059	51,768	44,137	42,191	39,065

▶ 人口増減率 (単位:%)

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-47.3	-24.5	-11.5	-7.4

▶ 高齢者・若年者比率 (H22年) (単位:%)

高齢者比率(65歳以上)	若年者比率(15歳以上30歳未満)
34.2	11.4

ビジョン早田実行委員会

わが町、そしてかけがえのない故郷早田の存続にむけて



早田大敷：町の基幹産業として共に栄えてきた大敷網。町と同様に高齢化が進み、担い手対策が必要となっていた。ビジョン早田実行委員会の漁業者部会では担い手対策やガンガゼ駆除などに取り組んでいる。

事例の概要

尾鷲市早田町は、高齢化率 66.23%と、同市内の他地区に比べても過疎・少子高齢化が著しく、基幹産業である大型定置網漁をはじめとする水産業の振興や後継者対策などが急務であった。

このような状況の中、地域づくりの中心となる「ビジョン早田実行委員会」が産官学連携により発足し、生活・産業・人口問題などを多面的に捉えた地域活性化事業が、「自分たちのできることを、自分たちで可能な範囲で」という考え方のもと、住民主導で行われてきた。

また、(株)早田大敷などの『産』、慶應義塾大学や三重大学などの『学』、関係する行政機関などの『官』などとの協働により、地域資源である豊かな海・山の恵みを生かした地域活性化を図り、地域課題の解決実践に向けて、多面的に事業が実施されている。



笑顔食堂：尾鷲市元気プロジェクトの事業により生まれた笑顔食堂。ビジョン早田実行委員会の食担当部会としてワンコインで一人暮らしのお年寄りや若い漁師のためのお弁当として利用されている。

評価のポイント

過疎・少子高齢化が進む三重県尾鷲市早田町では、「限界集落」問題の報道に危機感を抱いた有志が県の中山間地域支援事業を活用し、三重大学の力を借りて、地域資源の発掘や課題を話し合う「ビジョン早田」や学生との交流会である「はいだといっしょ」を重ねながら、活動の合意形成を図り、平成21年に「ビジョン早田実行委員会」が設立された。

実行委員会は、5つの部会（①漁業者部会②ホームページ部会③地域作り部会④防災部会⑤笑顔食堂）から構成され、地区住民の有志が関心のある部会に参加して、活動が進められている。例えば、漁業者部会は、漁業の担い手確保を目的とした「早田漁師塾」を運営し、漁業に興味を持つ若者を4週間にわたって受け入れ、漁業や漁村での生活を学ぶ機会を提供している。地区のお母さんたちも、彼らの暮らしを支えることでお互いの関わりが深まり、漁業就業者として定住する者が生まれている。

また、笑顔食堂は、女性たちが中心となる地域作り部会と連携しながら、「早田には食事のできる場所がない」という課題を解決するために、月に一度、高齢者のためにお弁当を作り始めている。お弁当の評判も次第に広がりを見せ、女性たちのさらなるやる気を生んでいる。

団体設立前から現在まで、時間をかけて丁寧にビジョンを作り、着実にその活動成果を積み上げ、また、地区出身者や関わりができた学生たちにも情報を発信し、「はいだサポーター」として活動を応援してもらいながら、早田地区では「限界集落」を払拭するような多彩で前向きな活動が生まれている。

このように、地区内部だけでなく「よそ者」とも交流し、その質の向上に努め、地域を前進させるビジョン早田実行委員会の取組は、「小さな自治」による地域づくりの広がりを見せる優れたモデルケースと言える。



町の敬老会：毎年敬老の日で開催される。笑顔食堂のメンバーでお弁当やお刺身、フルーツなどを準備し、地域作り部会のメンバーで出席者のおもてなしを行っている。



お正月だよ全員集合：1月2日の一大行事であったお弓行事は人数不足のため廃止された。お正月に帰省しても行事が無いので寂しいという声を聞き、餅つきやかるたなどで、みんなの交流の場を復活させた。



早田寒ブリ祭り：魚食文化の普及、特に熊野灘の美味しいブリをたくさんの人に食べてもらいたい。行政関係団体の支援も受け、ビジョン早田実行委員会の各部会が総出で第一回早田寒ブリ祭りを開催した。

DATA 三重県尾鷲市 (おわせし)

団体名 ● ビジョン早田実行委員会
所在地 ● 〒519-3702 三重県尾鷲市早田町6-3 (尾鷲漁協早田支所内)
連絡先 ● TEL:0597-29-2039 FAX:0597-29-2784
E-mail:visionhaida@gmail.com URL:http://village.localblog.jp/owase-haida/
【交通のご案内】
自動車 ● 紀勢自動車道 尾鷲北ICから 国道42号、国道311号で約30分
鉄道 ● JR紀勢線尾鷲駅からバスで約40分
飛行機 ● 中部国際空港から自動車で約2時間30分



▶ 国勢調査人口 (単位：人)

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
34,534	31,348	23,683	22,103	20,033

▶ 人口増減率 (単位：%)

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-42.0	-36.1	-15.4	-9.4

▶ 高齢者・若年者比率 (H22年) (単位：%)

高齢者比率(65歳以上)	若年者比率(15歳以上30歳未満)
36.0	9.1

もんでこい丹生谷運営委員会

ふるさと那賀町に「もんでこい」と呼びかける 住民団体の取り組み



劇中では、柚子搾り機やはんごろしが登場し、那賀町での生活をリアルに再現。「何でも自分で作る」という田舎ならではの生活の知恵を随所にちりばめている。

事例の概要

「もんでこい丹生谷運営委員会」は、過疎化・少子高齢化が進む那賀町において、この地を取材していたジャーナリストの「地元に戻ってこないなら、こっちから東京の息子のところへ押しかけて行こう」との提案がきっかけとなって、町内の有志により平成21年に設立された。

これまで、平成21年から毎年、開催地を東京、那賀町、大阪、東京と変えながら、ふるさとの良さを、ミュージカルやビデオレターなどにより町出身者を含む都市部住民へ伝える交流イベントを行っており、参加者のうち3世帯5名が帰郷移住するなど、運営委員会の活動が町の活力を取り戻すことにつながっている。

また、幅広い年齢層が一丸となって舞台を創るという経験を共有し、多世代が交流する場ができたことで、ふるさと回帰を訴えるだけでなく、町住民自身のふるさとへの愛着が一層育ち、5町村が合併して生まれた「那賀町」が本当の意味で1つになれるきっかけになっている。



殿谷加代子会長

評価のポイント

「ふるさとを離れた人に、いつの日か戻ってきてほしい。」

過疎化が進む徳島県那賀町で「もんでこい（戻ってこい）」を合言葉として、平成21年に活動を開始したのが「もんでこい丹生谷運営委員会」である。

活動の中心は住民の手づくりによるミュージカルであり、中学生から70代までの住民が参加し、脚本、演出、舞台音楽の作詞・作曲、上演の全てを住民が担っている。平成17年に5町村が合併して誕生した那賀町全域からの参加を意識しており、世代・出身地を越えた交流の場となっている。

毎年、東京や大阪で出身者を対象とした「那賀町祭」で上演し、町の魅力、田舎の暮らしの良さを、演劇を通して伝える。ミュージカルを観た人は誰もが胸を打たれ、涙を流すという。

活動を開始してから、U・Iターンを含め、約50人が定住するまでになった。さらに、年に1~2回、高齢の家族に会いに戻ってくる人も増えている。定住者が増えるにつれ、仕事の場の確保が課題となってきたことから、特産品のゆずの加工場を新たに設立する動きも出てきている。

会長は2代にわたって女性であり、ミュージカルの台本を保健師が執筆、作曲は女子中学生（当時）が担っており、女性がリーダーシップをとりながら地域をまとめていることも興味深い。

このように、住民が力を合わせて地域を題材にしたミュージカルを開催することによって、那賀町の良さを再発見し、ふるさと回帰、定住者増加につなげている。多世代交流の場となっており、女性が活動の担い手であることも高く評価された。



ヘルスメイト（那賀町食生活改善推進員）手作りの郷土料理が並び、那賀町祭の参加者はふるさとの味を懐かしみ、舌鼓をうつ。



那賀町祭では地域再生塾や商工会・JAの協力のもと、物産展も開催。ゆず商品を始めた特産品を参加者は買い求める。



月1回開催されているもんでこい丹生谷運営委員会で、現状報告や様々な課題についてしっかり協議している様子。

DATA 徳島県那賀町（なかちょう）

団体名 ● もんでこい丹生谷運営委員会

所在地 ● 〒771-5411 徳島県那賀郡那賀町横字大板35相生ふるさと交流館内

連絡先 ● TEL: 050-8809-7807 又は0884-62-1184*（※那賀町役場企画情報課内）

FAX: 050-8809-7807 又は0884-62-1177*（※那賀町役場企画情報課内）

E-mail: montekoi@whk.ne.jp URL: http://www.montekoi.jp/

【交通のご案内】

自動車 ● 高松自動車 鳴門ICから国道55号線・195号線で約2時間

鉄道 ● JR牟岐線桑野駅、桑野駅から徳島バス乗車

川口営業所バス停で乗り換え、もみじ川温泉で下車徒歩10分

飛行機 ● 徳島阿波おどり空港から車で約2時間

▶ 国勢調査人口（単位：人）

昭和35年	昭和55年	平成12年	平成17年	平成22年
23,279	14,360	11,893	10,695	9,318

▶ 人口増減率（単位：％）

H22/S35	H22/S55	H22/H12	H22/H17
-60.0	-35.1	-21.7	-12.9

▶ 高齢者・若年者比率（H22年）（単位：％）

高齢者比率（65歳以上）	若年者比率（15歳以上30歳未満）
42.4	7.4

